11 月 12 日のメッセージ

聖書：創世記　12：　1－9

「主の言葉に従って」

「アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。」(創世記 12:4)

教会に長く通っていると、この言葉は当たり前のように思えます。しかし、一歩教会の外に出れば、「なぜ、アブラムは何の保証もないのに出かけられたのか」、「確証を得るために何の努力もしないとは」と聞かれます。

そのように尋ねる人の多くは、いわゆる「賢い」人です。自分自身で理解して、納得しない限り、行動することを恐れる人でもあります(「ユダヤ人たちが、『あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか』と言うと、」ヨハネによる福音書 8:57)。その気持ちはわからないでもありません。やはり、人は安心して歩みたいものだからです。「石橋を叩いて渡る」ことができれば、それに越したことはないのです。

では、主の言葉を信じて一歩踏み出したアブラムは「賢くなかった」のでしょうか。決してそうではありません。

アブラムは聖書の中で、何度も神に問い、神から答えを引き出しています(例えば、「アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。』」創世記 15:2)。だから、この時もアブラムは、何も考えずに主の言葉に従ったわけではないでしょう。祈り、願い、神に聞いて、彼は出発しました。言葉によってこの世界を創造された神には、約束を実現される力があると確信して、主の言葉に従ったのです(「神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。」ローマの信徒への手紙 4:21)。

「神の言葉だから」と鵜呑みにすることなく、神に従っていくこと。この姿勢が大切です。問い、聞き、祈り、応えていく。知恵と知識を与えられた私たちの、真に「賢い」振る舞いが求められています。

その視点から現代を見る時、「あなたの子孫にこの土地を与える。」(創世記 12:7)という神の言葉が、今のイスラエルを支える言葉となっていることは間違いないでしょう。そして、聖書は確かに歴史に於いて神がイスラエルの人々に土地を与えたことを記録しています。神は必ず約束を守られる方でもあると何度も繰り返しています(「主はとこしえに契約を御心に留められる／千代に及ぼすように命じられた御言葉を」詩編 105:8)。しかし、すでにそこに暮らしている人たちを追い出すことは、神の目に適っていると言えるのでしょうか。百歩譲って、最初の立ち上げの段階には、周囲との契約が成立していたとしても、その後の増長までもが神の約束と言えるのでしょうか。

もちろん、今あるものがなくなれば、全てが解決するなどと言いたいのではありません。「神の言葉だから」と吟味することなく、また、相手があるのにそのことを少しも考えないことが問題なのです。

「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』」(創世記 1:28)

そう言われたから、何をしても良いのだと、うそぶいた時代は確かにありました。しかし、今はそのような時代ではありません。経済最優先で何でもありだった時代でもありません。

「自分さえ良ければ」から離れて、全てのいのちを、全ての存在を生かし、共に手を携えて未来を造るために、私たちは選び出されたはずです。

今こそ、この神の思いに、「主の言葉に従って旅立」つ時なのです。